

1935 年の楠木正成をめぐるいくつかの出来事

－ナショナル・ローカル・資本－

森 正 人

Abstract : This paper focuses on memorial events for Masashige Kusunoki, in 1935, who is medieval warrior and was regarded as a national symbol of the Japanese spirits before the World War II, in Kobe city. As this year was the 600th anniversaries for an establishment of a dynasty Kusunoki had been involved, some national memorial events for him were held in Kobe city where Kusunoki had been killed. Especially this article is attentive to a domestic expo organized by Kobe city and a series of activities held by Kobe Newspaper. The domestic expo, *Kobe Kanko Hakurankai*, had three venues displaying objects including archives, photos, artificial historical sceneries using special visual devices. It posited local objects with national one in order to stress their mutual relation.

Kobe Newspaper organized a campaign to build up a bronze statue of Kusunoki in Kobe city. Not only this campaign related with Kobe city, but also it needed a donation from local people in same prefecture. Newspaper showed names of individuals or groups, their residential cities, and amount of donation of the local people. Many local places, even in a local island where had a big disaster which caused a loss of their properties, collected the donation systematically. It evoked local identity to support a construction of a national symbol. Moreover, newspaper's article implied a connection such a local identity and national identity. Local identity was easily and effectively translated into national identity.

This process indicates how the local and the capital helped a constitution of the national. Capital, local and national had indeed complex layers.

Keywords : local identity, national identity, capital, Masashige Kusunoki, Japan

1 はじめに

1868年に発足した明治政府は、西洋近代国民国家をモデルとして国家の統治システムを整備する。その中で、太古から連綿と同一領域内において同一の国民が住み続けてきたという想像の共同体を支える国民アイデンティティを作り上げるために、天皇を中心に位置づけ、古典的な政治システムを象徴的に復活させた。また、国家と天皇を同一視し、両者が継続的に「国体」として節合される日本近代国家システムでは、天皇への忠誠が重要であった。それゆえ、それを具現化した歴史的人物の顕彰は国民アイデンティティ創出の重要な手段となり、とりわけ楠木正成の顕彰は近代国家システム以前の状況とも関わりながら最も重要視された。1870年に湊川神社が創建され、1900年に宮城前に銅像が設置されると楠木の忠誠は可視化され、これらは天皇への忠誠を涵養するための重要な装置となった（森 2007）。

森（2007）では、この銅像は西洋の他者として位置する日本のアンビバレンス、すなわち西

洋的枠組みにおいてしか日本的なるものを表現できないという、当時の日本がおかれた矛盾が反映されていたことを明らかにした。その後、1905年の日露戦争での勝利以後には日本的なるものと近代の再定義がなされ（西川 2001）、1910年からの南朝正閏論争では楠木が属した南朝の正統性が主張された（山崎 1911）。こうして絶対化された楠木は、継続的な実践を通して国家との関係を常に確認し強化する必要があった。その重要な契機の一つが、1935年に開催された楠公六百年記念祭だった。本来なら楠木正成没後六百年は1934年であり、実際、楠公を祀る大阪府千早赤阪村の観心寺では一足先の1931年5月に六百年祭式典を執り行っている。しかし、本事例をはじめとして、大阪朝日新聞社や大阪府内での式典の多くは1935年に行われた（なお、両者の関わりについては別稿を用意する予定である）。

楠公六百年祭がこの時期に行われたことには、重要な意味があると考えたい。1931年に満州事変を引き起こし中国への侵略を徐々に開始していた「非常時」の日本にとって、日本の文化的象徴の強化は柔らかなファシズムの方策として機能した。1934年には弘法大師が日本文化の創始者として日本と節合され、展覧会を通じてそれが人々に示されていた（森 2005）。そして、1935年には楠木、1936年には聖徳太子が同様に取り上げられ、それらに関わる事物が展示される大々的なイベントが行われたのである。また、1940年の皇紀二千六百年を目指し、日本青年館に事務所を置く建国祭本部では、「神域」として橿原神宮を改修する計画を立て、全国に趣意書を配り賛成者の記名調印を1935年から求めている。

こうした背景で開催された楠公六百年祭は、湊川神社史という視点ですでに紹介されてきた（藤巻 1939、森田 1987）。しかしそこでは、湊川神社の外側で商業的な目的を含みながら執り行われたイベントの数々は、あまり紹介されていない。本稿で紹介するように、このイベントには、神戸市や神戸新聞社といった複数のエージェントのイベントが平行していた。神戸市は同年に観光博覧会、神戸新聞社は展覧会と銅像の設置を行った。こうしたエージェントのイベントによって、市・区・町という地理的スケールでの実践が喚起され、それを通して、国家というスケールでのアイデンティティが作りあげられていったと考えたい。湊川神社による国家的な祭祀と平行して行われたイベントが、どのようにローカルなアイデンティティを呼び覚ましなが、ナショナルなアイデンティティへとスライドしていったのかという問題は、ナショナルとローカルの節合を問ういくつかの近年の試みに共鳴している（「郷土」研究会 2003）。

そこで本稿では、楠公六百年祭そのものの分析はひとまず横に置き、それに平行して行われた神戸観光博覧会と神戸新聞社の展覧会および銅像設置運動に注目する。資料として、観光博覧会の報告書と『神戸新聞』の記事を用いる。

2 日露戦争三〇周年という契機

1935年は、勝利を収めた日露戦争からちょうど三〇周年にあたる。この戦争での奇跡的な勝利が、日本に西洋とは異なる近代化の想像を可能にした。そしてこの戦争以降、日本は戦争を経験しておらず、非常時を迎えた日本は栄光の戦争の記憶の風化とも対峙していた。紙幅の都合で全国的なイベントの詳述は避けるが、例えば日本帝国海軍がバルチック艦隊を倒した1905年5月27日からちょうど30年後の1935年5月27日には、東京の芝公園には天皇が行幸し祝賀の式典が執り行われ、また各地でも同様の式典が開催されるなど、日露戦争三〇周年の式典はこの時期の日本にとってとりわけ重要な意義を持った。

神戸市ではそれのおよそ2ヶ月半前の3月10日に、早朝から市内八区の各校でおよそ六万人の男女学童が日の丸の小旗を打ち振りながら街頭行進を行い、夜には市内のいくつかの場所で講演会が開催された上に、二万一千名の歴戦者に対し記念の手拭いが贈呈された。また神戸新聞社は3月9日よりそごう百貨店地階で百余点の写真をもとに日露戦役懐古写真展覧会を開き、翌日には兵庫大開小学校で日露戦争の戦況を講演する懐古講演会の他、神戸市連合少年団二百名による自転車隊ラッパ行進を挙行了。後述するようにこうした若年層の巻き込みは「第二国民」のアイデンティティ強化にも役だった。

しかも当時、楠木正成は戦術に優れた軍人としての評価を得ていた。したがって、楠公六百年祭は軍隊との関わりを持ったし、その関わりを積極的に人々に示した。実際、1883年に行われた五百五十年祭式典には、陸軍第四師団が神前軍楽の奉納を行った。

1935年3月には楠公六百年祭奉讃会長である勝田神戸市長が、「海軍を代表して参拝される声は国民精神作興の上に最も意義ありまた祭典当日の神戸港に軍艦碇泊海軍思想の普及に効果」（『神戸新聞』1935年3月5日）もあるということで、祭りの当日帝国軍艦の神戸港派遣するよう呉鎮守府に送達し、先方より3月24日から28日まで神戸港へ整備戦隊旗艦「天龍」を派遣するという回答を得ている。また、日露戦役三十周年と大楠公殉節六百年祭を記念した兵庫県郷土軍篠山連隊三百名が、3月16日と17日に「日露戦役三十周年大楠公六百年祭記念連合演習」として空軍陸軍の連合演習を行った。16日には宝塚市で雨中に野外演習を行い、伊丹町に移動して国防婦人会員や小学児童らの歓迎を受けながら小学校に入り昼食を取った後、川辺、武庫、西宮の青訓生一千名と合流し、東軍と西軍に分かれて、再度連合演習を行った。翌日にも神戸市の会下山で合同演習を再度行い、蓮池小学校で昼食を取り、国防婦人会員の慰問を受けながら家族との面会を行った。篠山連隊からの三百名は神戸市出身者が選ばれたが、これは家族との面会の機会を与えるためであった。その後神戸市中を行進して湊川神社に参拝し、市立第二高で神商大附属将校池田大佐が湊川合戦の状況を講演した。この講演では楠木正成の天皇への忠誠と犠牲の尊さが語られた。

重要なのは、この連合演習には地元の青少年が参加し、一般人の観覧が許されたことである。しかも、国防婦人や小学生といった戦争中には銃後を守る人々の積極的な支援も求められた。こうして、非常時における「国民」の責任が確認されたのである。

銃後の心得は、軽巡洋艦天龍の一般拝観やその報道を通してでも伝えられた。天龍は24日に神戸港に入港し、繋留停泊しており、25日に一般は如何が許された。新聞記事によると「朝来在郷軍人、青年団、学生、生徒らを始め多数の人々が続々と押し寄せ艦上は大賑ひ」だったという。そこでは、大砲や魚雷の操縦方法のほか、国防費の必要性が説かれただけでなく、戦艦内の生活における生活水の貴重さも強調され、「見学の婦人連「水道の水も粗末に出来ません！」と顔を見合せて感嘆した」と記事には書かれている。

3 楠公六百年祭記念神戸観光博覧会というエージェント

(1) 集められる物品

楠木正成を国民的英雄としていく実践は、国家的な行事だけに見られるのではなく、ローカルな行政単位でも行われていた。その一つが神戸市を中心として、大楠公六百年祭に並行して行われた「楠公六百年祭記念神戸観光博覧会」であった。これは1935年4月1日から5月30

日の合計 50 日間行われ、その目的には「一つは国民精神の作興を図り一つは以て産業の交流を企図せん」（神戸観光博覧会 1935, 1）とされた。

この博覧会に向けて、日本市臨時観光施設調査委員会によって博覧会協会が承認されたのが 1934 年 11 月 19 日であり、同年 12 月 22 日に発起集会が行われた。発起人には兵庫県知事をはじめとする県関係者や、日本郵船神戸支店長、大阪商船神戸支店長、市臨時観光施設調査委員など 57 名が名を連ねている。そして、神戸市長勝田銀次郎が博覧会長を務めた。予算は 10 万円とされた。

会場は湊川公園会場、六甲山会場、福厳寺会場の三つが設けられ、湊川公園会場は観光館、楠公館、歴史館、物産館、余興館を含んだ。第一会場、湊川公園会場は、楠木正成の古戦場であり、立地や背景となる六甲山の色合いを考慮して選ばれた。「楠公六百年祭記念観光博覧会」の赤色大文字を掲げた入り口正面には神戸の名所とされる布引の滝の高さを三分の一、幅を十分の一にしたミニチュアが作られた。夜間には五色の照明灯でライトアップされた。

その向かって左手には、木像掘立平屋造の漆喰塗仕上げの観光館が置かれた。観光館には、各自治体や団体、とくに鉄道省観光局からの出品の申込が殺到していたので、建設費二千五百円をかけて新たに第二観光館を設け、鉄道省の出品に対応し、また特設館が設けられることが決定された。新たな観光館の半分は売店として用いられることになった。第一観光館では長崎市、北陸都市連盟、山梨県景勝地協会、兵庫県観光協会といった各県、各市の観光協会や観光課、南洋郵船、日本郵船、南海電鉄や、山陽電鉄、阪神急行、六甲ロープウェー、神戸有電鉄、摩耶ケーブル、赤穂鉄道、洲本町、姫路市、阪神電鉄、摂陽商船などの交通会社、ホテル、トーマス・クック商会などが各地の風景や沿線などの名所などをパノラマ、ジオラマ模型で提示した。また第二は、先述の通り鉄道省観光局と国際観光局の出陳品が並べられた。これらの展示は、日本の景勝地を館内で味わうことができ、まるで日本を観光しているようであるとされた。

滝の右手には楠公館が置かれ、湊川大合戦、正成幼時の修学、後醍醐天皇から始めて召された正成、赤坂城の戦、千早城の戦、正成公の聖駕奉迎、楠公父子の別れ、正行が母の訓戒を受ける場面、正行の出陣、瓜生野の戦、四条畷の戦の十場面がパノラマで展示された。それにより、楠公父子の忠誠が視覚的効果を伴って示されると考えられたのである。

噴水前の歴史館は「大楠公の没後、大楠公思想が日本国民に如何なる影響、感化を与へたかを如実に知らせよう—との方針のもとに」（『神戸新聞』1935 年 4 月 6 日）物品が収集された。ここには、瀧野の脇坂家が所蔵する大楠公愛用の南蛮鉄製兜や、全国から集めた貴重な資料、国法、湊川神社の宝物も展示された。さらに、数千百の楠木に因む史料も年代順に陳列された。これらの史料は二つに大別される。第一は古代から現代にいたるまでの「郷土資料」で、神戸市初等教育研究会手工部に委嘱して作成された。第二は、「大楠公関係及大楠公祭典年譜」と称されたもので、それには資料約 200 筆、絵画 20 点、写真 30 点が含まれる。具体的には楠木にかかわる史料（吉田松陰や旅人の参拝、大楠公五百年祭、碑域拡張等）、横山大観をはじめとする六十人の大家の筆による楠公讃迎画、神戸市内小学校の図画の教員が描いた楠木に因む洋画と日本画、さらに豊臣秀吉の検地の史料、さらに全国各地の楠公社写真などが含まれる。

こうした文献資料の内でも、湊川上流絵巻、会下山絵巻、大楠公画像、正成公所用の矢筒、霧山城趾実測図、東御所実測図、楠公史蹟図文禄三年片桐市正検地、秀吉朱印状、南狩録、大日本史編纂記録などが見るべきものとして新聞紙上で紹介された。一見して分かるように、楠木に関連しない豊臣秀吉関連の文書（大地震の復興等で神戸の発展に尽力したとの理由）まで

陳列されているが、注意すべき事は、「今日全日本に溢る、大楠公精神発揚の源泉は遠く之等の人々に遡り得べきもの」である史資料が、大日本史編纂記録という、すぐれて日本の一國史を顕示する書物と併置されていることである。そうすることで、楠木は日本の単線的な歴史の中に位置づけられる。

物産展は日本全国の特産品を模型や漫画を応用して陳列した。とりわけ「産業の日本」と名づけられた模型は、日本各地の名所、旧跡、風俗、大工場などにあわせて、それらの生産品、土産品等を動物的かつ漫画風に展示し、模型前のケースには各地の土産物や工芸品等が陳列された。これにより日本の産業の「躍進状態や観光地等が会得出来る」（神戸観光博覧会 1935、13）とされたのである。この「産業の日本」には東京市をのぞいては、西日本にある各市役所からのほか、企業から工業品が送られた。また、この模型を統計的に示した「産業日本の現状」も設置され、全国の工場数、職工数、工産額及び対外貿易額を、工業別や主要港別に点滅する電器装置で示した。こうした物産は、海外からの来訪者に対して日本の工業力を示すものとしても認識されていた。さらに、ここでは神戸市の土産物として、磯馴味噌、甲南漬、漆器、陶器のほか、新しく発案された六甲スキー餅や楠木に因んだ忠孝菓子、菊水饅頭も販売された。その他会場中央東側には、常設音楽堂を臨時に拡張した余興館を建設し、舞台でのイベントに対応した。

第二会場、福厳寺会場では、同寺がある兵庫区内の小学校児童が共作した二十四場面の楠木の絵巻が展示された。また、太山寺から出陳された国宝の法華經三十二卷、国宝佐々木四郎の甲冑、京都南禅寺の「後醍醐天皇臨幸録」、楠公関係の書画二十八軸が展示された。ここでも庭隅の地藏堂で、後醍醐天皇が楠木正成を召した場面のジオラマが置かれ、また広場に設けられた余興場では、兵庫区の青年達が隠し芸を披露した。

第三会場、六甲山会場は六甲山の植物園内に設けられ、参考館、山岳館、余興館が建設された。参考館では、博物学の珍しい参考品、例えば、動植物の標本が陳列された。また山岳館では六甲山や日本各地の山岳の山岳写真数百枚の他、外に明治初めに六甲山を開いたと言われるブルーム氏の遺品などが並べられた。

（2）具体的な過程

1935年3月1日の神戸新聞記事には、観光博覧会を間近に控えた協会の状況が詳しく紹介されている。それによると、1935年3月の時点で、会場の湊川公園では設備の設計が終わり、勸業館から水族館にわたる土地を四角に区切って板塀の工事に着手していた。広告活動に関しては、協会は縦四尺、横三尺の三色刷りのビラを一万枚印刷し、全国の自治体や諸団体に送付していた。また、葉の他、神戸市内の三十余りの寺の史蹟や伝説地の詳細な解説を加えたリーフレットを配布する準備を整えていた。さらに、神戸市電の車両内にはセロファン製の宣伝紙を貼付した。この他、博覧会が迫ってくると、姫路、岡山、大阪など近畿地方の都市に大アーチ、アドバルーン、ネットサインを設備し、特に阪神間一帯には飛行機を用いて空から官伝ビラをまき散らすことまで述べられている。

実際には、2月よりポスター二万枚が全国関係各方面に送られ、セロファンのポスター五千枚が市内や近郊の街頭および、交通機関等に貼付された。また、中吊ポスター三千枚も市電、市バス、京都市電等に貼られた。岡山市、吹田市、神崎市に野立看板が、市内各所に街頭看板が、神戸駅前には宣伝看板が置かれた。その他、宣伝マッチが二十万箱作られ市内や近郊に配

られ、駅弁のビラにも広告が印刷されている（神戸観光博覧会、1935）。さらに神戸市内では大倉山、三角公園、相生橋ガード下、神戸取引所前の主要場所に華麗な宣伝塔が姿を現し観光博の雰囲気盛り上げていた。

4月1日から三つの観光博会場に白、赤、紫、黄、緑の総計五千個の電球が設置され始め、13日の完成にともない点灯された。第二会場の福厳寺の周辺では、観光博覧会に向けて独自の取り組みも行っていた。周辺の寺院はそれらが持つ宝物の展示を行い、また周辺の切戸南逆瀬の商店街や御崎八幡薬仙寺附近に至る商店街は揃いの提灯で電飾し、馬上の大楠公や菊水の紋様を描いた旗をつるし、協賛の意を表したのである。

入場券の前売り券は、3月8日から神戸市各区長を通して販売され始めた。前売り券の大人は当日券より十銭安い20銭、小人は五銭安い10銭であった。ちなみに、当時の公務員の初任給は七五円、コーヒー一杯が一五銭であった（週刊朝日1987）。また、観光博覧会と大楠公六百年記念祭に多くの観光客の訪問が予想された神戸市では、それまでの土産物であった牛肉と瓦せんべいの他に新たな土産物を開発することが神戸市観光課と商工課で議論された。これを受けて、3月9日に土産品協会が発足し、博覧会の土産陳列館を新しい土産物で飾ること、及び将来協会経営の土産物陳列館を元町通りの繁華街に設けること等を申し合わせた。

会場建設のための地鎮祭は2月20日に行われ、4月11日の開会式に向けて突貫工事が進められた。開会式には九百名強が招待され、開会式当日は雨天であったが空席がないほどに多くの人が詰めかけたと言われている。式では、内務大臣、文部大臣、兵庫県知事、神戸市会議長、神戸商工会議所会頭、出品人総代が挨拶を行い、また鉄道大臣と台湾総督府長官からの祝電も披露された。

開催直後の4月14日には歴史館西側入り口の古代の歴史に関する陳列場で、天井や壁代わりの垂れカーテンをつたっての雨漏りが起こったが大きな問題はなく終了した。団体での訪問も多かったようで、近畿一円からもあったが、神有、山陽その他の郊外電車沿線からが最も多かった。4月28日には淡路島にあった津名郡女子青年団が観光博覧会を訪れている。彼女らは観光博覧会を訪れた後、大阪河内の観心寺を訪れ、後村上天皇御陵も参拝して同所に一泊し、翌日は榎原神宮、畝傍を参拝して、当所でさらに一泊、30日に吉野山と小楠公遺蹟を巡って神戸発汽船で帰宅した。こうした団体入場者の最高記録は5月6日に紡績高砂工場の女工千七百名、7日に神戸若松小学校生徒二千名が来場したときだった。

4月23日からは国際観光デーが始まり、神戸、京都、横浜、名古屋といった観光にゆかりのある日本中の25都市でイベントが行われた。神戸市の観光博でもこれに併せて、23日には入場者に対し先着順により土産品の贈呈、24日は同様方法でマッチ一袋の贈呈、25日には同様で絵葉書一組の贈呈、25日の夜は観光映画の上映と記念スタンプの押捺が行われた。これにあわせて24日は1万人以上の来訪者があった。

観光博覧会の記録文書や神戸新聞からは、この会期にどれほどの人が訪れ、どれだけの収益があったのか明らかではない。しかし、神戸新聞の記事で観光博が始まった4月11日から5月6日までの26日間で、湊川公園会場での入場者数は18万人になっていることを紹介するものがある。それによると、一日平均の入場者数は七千人となる。また、入場者数の最高記録は5月5日の日曜日に作られ1万6千121人だった一方、最小記録は雨天だった4月11日で1346万人だった。最高の入場料売り上は4月14日に達成され、2,565円30銭であった。とくに、会期後半は楠公六百年祭に近づく状況だったので、入場者は尻上がりに増加した。入場料

金のほかに郊外電車、バスなどの連絡券からの収入を加味すると、合計は9万円強になると試算され、さらに観艦式記念港漕博覧会からの補助金二万円があったから、「この博覧会は儲かる」といふ結論に達する」（『神戸新聞』1935年5月7日）とされた。

4 エージェントとしてのマス・メディア—神戸新聞社を中心に

(1) 楠公の音

こうした楠公のイベントの実行とその情報の流布、さらに楠木に対する感情の形成に大きく関与したのがマス・メディアだった。

たとえば、タイヘイレコードは楠公を讃えるレコードを出版した。これには詩吟、筑前琵琶、朗誦、映画説明、舞踊新小唄のほか、唱歌、童謡舞踊、教育劇など子供向けのものも含まれていた。タイヘイレコードだけでない。コロムビアは、中野忠晴を表看板に「大楠公の戦」と新民謡の「楠まつり」を一枚一円五十銭で売出した。テイチクは、楠公会推薦国民歌の「大楠公」や琵琶歌「大楠公の至誠」を一円で売り出した。この他、ニッソーは子供をターゲットにした童謡「楠公さま」金の鈴子供会の合唱「青葉茂れる」を表裏一枚で一円、ビクターは流行歌手藤山一郎の「大楠公の歌」四家文子独唱「青葉茂れる」（一円五十銭）を、以前から引続いて販売した。こうした楠公に関するレコードは楠公に因んだ場所の中でも、大々的なイベントを行っていた都市部の神戸市が重要なキャンペーン地であった。実際、テイチクは新開地を中心として百二十件の特約店を持ち、大々的な宣伝活動を展開していた。

また、1935年の5月に行われた六百年祭に際しては、楠公に関するラジオ番組も大阪中央放送局によって放送された。5月21、22、23日の毎夜6時から国史物語「大楠公三部曲」「菊水の旗」「七生報国」の連続物語が行われた。さらに、22日からの四日間は新形式のマイクロフォン・ロケーション・システムによって「大楠公史蹟巡り」といふ番組が実況中継で放送された。具体的には、22日午前十一時から大阪女専教授の魚澄惣五郎が楠公誕生地で講演を行い、また山本旭錦師の「嗚呼正成公」と長唄「大楠公」がそこから放送された。23日は、千早城趾の上空機上より楠公研究家藤田精一と三上参次が講演を行い、また叶太夫の義太夫が放送された。24日午前十一時から、東條村楠妣庵より大仏次郎が「家庭の大楠公」と中村孝也が「楠公夫人」を講演し、また宮川松安の浪花節「大楠公と杉本左兵衛」が放送された。最終日であり、楠公六百年祭の当日でもある25日は午前十一時から湊川神社と福厳寺から六百年記念祭典実況を行うと同時に、宮地直一による臨地講演が放送された。ちなみに26日には、河内観心寺で六百年祭大法要があり、舞台劇「正成の死」の実演が放送された。

この他、5月19日には神戸市連合青年団音楽隊が奉賛の音楽を演奏しながら、永澤町の本部より湊川神社、神戸新聞社を経て栄町通を行進した。さらに、三宮大丸の屋上、生田神社、観光博会場でも演奏を行った。楠公の音は電波と音波を通して、演じられたのである。

音だけでなく、活字を通して情報を積極的に伝えたのが、1898年に神戸市に作られた神戸新聞社だった。以下では神戸新聞社の活動に注目してみよう。

(2) 楠公史蹟巡りと臨地講演会

1935年2月には楠木の誠忠を頌得する詩歌（漢詩、和歌、俳句）の募集が行われた。各一等には20円、二等には10円、三等には5円、佳作にはメダルが贈呈された。短歌、俳句、漢

詩とも一等は神戸市在住者が獲得したが、二等、三等は大阪市、京都市などの近畿一円のほか、大分県、香川県などの在住者も獲得している（『神戸新聞』5月10日）。また、5月18日には神戸市にある広厳寺（楠寺）で、すでに募集してあった数千句から厳選した入選句を俳画の名手である松井長平画伯の揮毫による冠句画百号あまりの陳列展覧を行う「大楠公冠吟画展」が開催された。

神戸新聞社はまた、阪神電鉄、阪急電鉄、大阪本鉄道を用いて、神戸市と楠公の生誕地である河内の楠公史跡を訪れる「楠公史跡巡り」を企画した。新聞読者には、神戸湊道阪神終点または神戸上筒井阪急終点と梅田、そして大阪阿倍野橋大鉄終点と河内長野間の乗車賃普通一円八十六銭が一円三十銭に割引され、また山陽バスの往復券も割引された。

さらに、同社は5月4日には福厳寺、5日には会下山公園と広厳寺で講演会を行い、その講演のいくつかの内容が紙上に掲載された。例えば、陸軍歩兵大佐池田賢十郎による「戦術上から見た湊川合戦」という講演では、楠木の戦略が今日の軍事的見地からしても優れたものであったことが述べられている（『神戸新聞』1935年5月10日）。さらに、

大楠公はすべての戦ひに芥子の覚悟で出陣せられた、この決死の覚悟といふのは日本人だけにあるもので外国人にはこの精神がないのであります、（中略）まづ第一に決死といふことを考へてをる、この精神がわが国のもつとも偉大なる誇りであり、且つまた名誉とすべきものであります、上司の命には絶対そむかない、命令なら火の中、水の中でも飛込むといふ精神は武人の唯一の生命とするところで、全く自己の利害をかへり見ず、何等の不平も云はずに誠心誠意命令を実行するといふ此の精神が武人の第一義でなければならない（『神戸新聞』1935年5月12日）

と、日本人の精神が戦地に赴く楠木の心持ちにすでに現れており、そうした日本人の精神を持っていたからこそ日清戦争、日露戦争、上海事変、満州事変を乗り越えてきたとすぐ後に語っている。そしてこうした犠牲精神に基づく日本人精神によってこそ現今の非常時が乗り切られるのである。

（3）大楠公展覧会

こうした大楠公の精神を物質的に提示したのが展覧会であった。1935年3月16日から、須磨遊園地内の人形館で神戸新聞社後援によって霧島人形展が開催された。ここでは大楠公六百年祭に因んだイベントが開催された。また、同年3月23日より30日まで三越六階で「大楠公展覧会」が主催を神戸新聞社、後援を海軍省、文部省、兵庫県、神戸市として催行された。入場料は無料だったが、後述する銅像建設のための寄付金を集める賽銭箱が設置された。

この展覧会には絵画や彫刻や文献などといった寺社や個人が所有する事物が展示された。表は出陳者をまとめたものである。ここからは、神戸市からの出品が多いものの、近畿、中国地方からの出品も見られる。近畿地方は楠公生誕の地である河内地方からが多い。全体としては民間人が所有する事物の方が寺社のそれよりも多いことも分かる。具体的に陳列された事物は紙幅の関係でここでは紹介できないが、例えば楠本家からの出品は「天下の逸品で国宝以上の真価あり神戸には未だ一度も出陳された事なく今回初めて」（『神戸新聞』1935年3月19日）と紹介されている。

展覧会のオープンに向けて、会場には次々と事物が搬入されていった。19日には吉野神宮

から「楠家世譜」「楠正成公の手紙」「正成公の書」「正成公祈願文」の四点、同じく吉野山吉水神社から「大塔宮御所用御湯呑」「楠正成公所用矢筒」「後醍醐天皇玉座御写真」「吉水全集」等、金剛山葛木神社より「大楠公画像」、四条畷神社から「小楠公咏懐詩」が搬入された。また、特に学生や児童の教育効果の向上を目指して、湊川合戦のパノラマ十一場面が設置された。当時の展示において積極的に用いられていたパノラマは、見る者と背景の間に事物を配置することで、展示に動的な効果を与える装置だった。この会場では、入り口を入って正面にパノラマが設置されており、そこでの人びとの経験を方向付けていくことになったと思われる。また、パノラマで用いられた正成公及び家臣の鎧、兜や、それぞれの場面は史実に基づいたものだと紹介された。名前は異なるもの、先述の須磨遊

園地内のイベントでも、「楠公婦人」「桜井駅訣別」「小楠公と辨の内侍」「菅原伝授鑑車曳」「酒吞童子大江山」「源平扇屋熊谷」「地震加藤」「鶴越逆落し」「源平一ノ谷合戦」等の歴史物、戯曲のほか、「弘法大師波切不動」「親鸞上人石枕」「日蓮上人龍口法難」など信仰に関するもの、さらには「日露召集令」「日本海海戦の三笠艦上」等の戦争に関するもの等のジオラマが設置された。

展覧会に戻れば、会場がある六階への階段中途から、千早城を想起させるデコレーションがなされ、それによって来訪者に建武中興や楠木が活躍した時代を感じさせようとした。また会場の正面には河内の楠妣庵にある大楠公と婦人の御像を祀った木造の祭壇を据えた。パノラマもデコレーションも、来訪者の会場での経験を、できる限り主催者側の意図した方向へと導くための装置であった。別言すれば、来訪者の経験は、こうした事物の配置によって方向付けられようとしたのである。

展示会の模様は、新聞の報道に依るしか知り得ない。それによると、2 日目の 24 日には朝来の降雨にもかかわらず続々と観衆が会場に蟄集し、午後には前日に数倍のにぎわいを見せたという。3 月 25 日には学校休暇中の学生、生徒、教職員、歴史研究家の増加が見られたと言う。入口に設置された祭壇や湊川合戦大パノラマに人びとは「敬虔と感嘆の気分」を感じ、とくに会場内の事物では、天野山金剛寺から出品された楠公父子決別に関わる「銀鞘龍文の短刀」、吉野神宮が出品した楠木正成の画幅、祈願文、楠木家の世譜、楠木の手鏡が混雑していたと言う。また、入り口の祭壇、会場中央の大楠公木像と正季以下十六士の霊牌には礼拝する姿があり、「場内に楠氏誠忠には対する敬虔の気」(『神戸新聞』1935 年 3 月 26 日) が漂っていたと紹介された。

表 展覧会への出品者とその出身地

神戸市	湊川神社 福厳寺 広厳寺 村上家 曾根家 間崎家 長田神社 五十崎家 米澤家 神田家 丸居家 江口家	兵庫県外	吉野神宮 吉水神社 葛木神社 四条畷神社 天野山金剛寺 藤井寺 楠び庵 楠本家 和田家 千早神社 延命寺 多門寺 竹田家 町井家 豊田家 大河原家 山崎家 野田家
兵庫県内	赤松家 興長寺 正明寺 小澤家 清水寺 久下家 香下寺 安積家 近江寺		

翌26日にはさらに人出が増し、終日、会場は動きが取れないほどの混雑ぶりだったと報道された。また、本当なのかと思ってしまうが、毎日のように会場に足を運ぶ熱心な人もいたとされる。この26日より、場内ではタイヘイレコードが出版した新小唄「楠公まつり」新流行歌「輝く忠誠」童謡「楠公をどり」唱歌「大楠公」映画物語「正行公と辯の内侍」詩吟「大楠公」琵琶「大楠公」教育劇「大楠公観心寺の巻」浪曲「大楠公」のレコードがかけられた。このような音楽により「来場者に一層潤ひ多い気分を豊かにしてゐる」が、「場内多数の陳列出品から来る敬虔な感情は旺盛して今更に楠公の偉業誠忠を思はすもの多く満堂尽忠偉烈護国の精神教育の史料の充実を語つて止まぬ」（『神戸新聞』1935年3月27日）と、展示物を丁寧にみることの必要性と、それを通しての国民教育の重要性がはっきりと語られてもいた。ナショナルなアイデンティティ涵養に、神戸新聞社の出版資本主義、タイヘイをはじめとする音楽産業、三越というデパートがエージェントとして、あるいはそれらの総体としてのエージェンシーが関係していたのである。

（4）銅像設置

展覧会は会期が過ぎれば撤収される。日常的に大楠公精神というイデオロギーの呼びかけを行うためには、恒久的な装置が有効である。このために、1900年に宮城の二条門前に楠木正成の銅像が建立されたが、その他に楠木の銅像は建てられていなかった。1935年5月10日付の『神戸新聞』に掲載された湊川新開地周辺のある店主の言によると「自分は大楠公戦死の地神戸に公の銅像のないのを遺憾としてその建設実現を常に念願してゐた」とあり、楠木の死地である神戸での銅像の設置がある人々からは求められていたらしいことが分かる。

詳細は不明だが、神戸市内のいくつかの学校の校庭にはすでにこの時点では楠木の銅像が設置されていたと思われる。というのは、1935年5月20日に、神戸市の蓮池尋常小学校では、銅像祭りが行われているからである。ここでは、校庭内の楠公銅像前を各学年の書いた「非法権天」の旗印、楠公に関係した絵画や書道の作品を貼付した灯籠で飾りつけ、その前に全校児童が整列して「大楠公奉賛歌」を合唱し、楠木に関する映画会を開いた。

楠公六百年祭に際して、1935年に湊川神社の近くにある湊川公園に銅像が神戸新聞によって設置された。この企画は、1934年5月の湊川神社例祭前後に社内会議で決定された。これを受けて社内に建設委員が設立され、銅像原型の製作が構造社の斎藤素蔵に委嘱された。斎藤は翌6月下旬に神戸新聞社を訪れ、楠公の武装立像、武装乗馬の二種を提示したものの、神戸新聞社側がそれらに満足することがなく、両者は検討を重ねた結果、次のような要求を満たす銅像がイメージされた。すなわち、（1）大楠公精神を形態の上に表現し、（2）湊川で戦死する直前の緊迫した状況を反映し、（3）三万余騎に対して七百余騎の小隊で少しも負けることなく戦った迫力を表現し、（4）こうした条件を芸術的に表現することであった。それにより「公の誠忠に対する追慕崇敬の念を新たにすると同時に、楠公精神の宣揚を図り、皇室を中心とする国民精神の涵養普及を企つる」とされたのである（『神戸新聞』5月22日付）。つまり、この景観は国家イデオロギーの装置としての期待を担ったのである。このイメージ作りには、関保之助が斯道考証の見地からアドバイスを与えた。

このような条件を兼ね備える湊川公園の銅像は、二条門前の銅像とは全く別のものだと言主張された。神戸新聞社によると、二重橋前楠公像が元弘の聖駕奉迎時の姿であるのに対して、湊川公園のものは湊川奮戦時のものと言う。当初は銅像設置場所として、湊川神社、会下山公

園なども考えられていた。しかし、湊川神社への設置は同一社内の一つの神を二つの形で祀る事が法規上不可能であること、会下山公園は湊川公園と同様に古戦場であるが、湊川公園よりも地理的に遠いということで、斉藤の来神に際して踏査がなされた結果、湊川公園に決定された。

神戸新聞社はこの計画を 1934 年 8 月に紙上で発表し、1935 年よりそれを積極的に読者に伝えていく。例えば、新春の読者奉仕として福引きを行った際、一等と二等は大楠公銅像模型、三等は楠公史蹟の図、四等は楠公父子桜井駅訣別図であった。また、1935 年 3 月には湊川新開地北部本通りの商店街を中心とする湊川公栄連合会では 30 日までの 15 日間、「大楠公銅像建設協賛大福引き売出し」が行われた。この収益から、銅像の建設費が寄附された。

神戸新聞社の計上した予算は 2 万 5 千円で、神戸新聞社からは 1 千円を支出したが、もちろんそれでは十分ではなかった。そこで市民からの寄付金の供出が求められた。3 月からは銅像への寄付者の氏名と金額が神戸新聞紙上で公表され始めた。それを見ると、滑川商店をはじめとする湊川神社周辺の店舗からだけでなく、姫路や城崎郡や豊岡群などからも寄附がなされたことが分かる。しかも姫路の場合、姫路会議所から議員や職員から醸金されているし、軍是といった工場や機関庫といった職場で集められた金銭も寄付金として送られている。また、学校からも職員や生徒・児童からお金を集めて寄付金として送付されており、例えば 4 月 10 日の新聞紙上には城崎郡の 30 校からの寄付金が紹介されている。

さらに、風水害の被害にあった飾磨郡家島においても、「大忠臣の銅像建設に漏れてはならぬ」と銅像建設の寄付金が拠出された。とりわけ家島内の坊勢では、風水害で漁船が全部大破あるいは流出する被害を受けたにもかかわらず、二百戸強から 15 円の寄付金が集められた。こうした寄付金の収集に対して「さうした中からも楠公に捧ぐるこの尊い純情的美挙には一般県民も自ら心を打たれるものがあらう」（『神戸新聞』1935 年 4 月 27 日）とあり、より一層の町を挙げての醸金の必要がほのめかされている。このほか、先述した「大楠公展覧会」会場に備え付けられた賽銭箱に集められた金銭が寄附された。

1935 年 3 月 20 日、銅像建立のための地鎮祭が、湊川神社宮司を斎主として執行された。その後東京で構造社という会社によって製作が続けられた銅像は、4 月 30 日に鋳工を終え、5 月 2 日に巢鴨駅に搬出され、鉄道とトラックによって 10 日朝に湊川公園に到着し、11 日に据え付けられた。当初の予定では、銅像の設置は 1934 年 12 月 20 日までであったが、遅延して大楠公六百年祭直前に仕上げられたのである。銅像の原型製作者と鋳造担当者も 11 日に神戸を訪れ、台座の取り付けに立ち会った。そして、1935 年 5 月 22 日午前 10 時、銅像の除幕式が行われた。式では林陸相、大角海相、松田文相、湯澤知事らが祝辞を伝えている。式の様子として

午前正十時湊川公園入口正面に屹立する銅像前祭壇を中心に、その南方及び西方に設へたる大天幕、紅白の諒幕あざやかなる所定の場所に藤巻斎主以下祭員並に参列諸員着席、先づ国家君が代の莊重なる修祓あり、次いで恭々しく進み出た祭主進藤本部長の手で花崗岩十七尺台座城、白布に覆はれたる銅像はするすると除幕され（以下略）

とある（『神戸新聞』（夕刊）1935 年 5 月 22 日）。除幕式当日の 22 日には、湊川神社周辺の滑川商店が中心となって模擬店を開き、酒、ビール、サイダー、コーヒーから関東煮、焼鳥、す

し、赤飯、饅頭等を楠水会席部仲居十五名、同階上食堂部女給十人、ハナヤ会席部仲居十五人、同階上食堂女給十人のほか、共立検芸妓三十余名を併せて総員八十名と多数の男性店員によって提供した。

(5) ローカルを／が作るナショナル

こうした、神戸観光博覧会、レコード販売合戦、銅像設置、また本稿では紹介していないが湊川神社によって同年に行われた「大楠公六百年祭」といった、楠木をめぐる一連のイベントは、神戸新聞社やレコード会社という資本、湊川神社という宗教、兵庫県や神戸市のローカルな行政が緊密に結びつきながら行われた。

全国的に販売網を持っていたレコード会社は、神戸市や河内という局所で行われたイベントに参画してレコードを制作・販売した。しかもそのレコードは神戸市を中心的な舞台にして販売された。ローカルなイベントを資本化し、その商品は国家的なレベルのアイデンティティを喚起し、しかもそれは局所で集中的に販売された。資本、ローカル、ナショナルの複雑な関係がそこにはうかがえる。

また、神戸市がイニシアチブを取って催行した神戸観光博覧会の発起人のメンバーには神戸新聞社が入っており、その博覧会の進行状況を逐一新聞紙上で伝えたし、博覧会に合わせて三越で展覧会を行っている。銅像設置においては、新聞社が銅像の建設場所の使用等を神戸市に願い出たところ、勝田神戸市長自らが現地を実査し場所を指定した（『神戸新聞』1935年5月22日付）。神戸市は設置された銅像の周辺に植樹をした上で外柵を設置した。さらに銅像の台座表面に嵌入した『大楠公像』という文字の揮毫を勝田市長に依頼したところ、1935年3月半ばに水垢離をして臨んだという。神戸市というローカルな政府と神戸新聞社というローカルな資本が共同して、ナショナルなイベントを作り上げたのである。

しかし、こうしたローカルなエージェントの共同がすぐに、それに賛同する国民を作り上げることに繋がるわけではない。ローカルな日常を送る人々は、こうしたローカルなイベントにおけるイデオロギー的な呼びかけに応え、積極的にそこに参与する事で、国民としてのアイデンティティを持つようになる。それは国家からの大々的な呼びかけとともにあるのだろうが、それとは少し異なる回路を持っているように思われる。すでに紹介したように、楠公銅像に際して一般からの寄付金が募られた。これは神戸新聞社の金銭的な問題もあろうが、寄付金を通して人びとの銅像への愛着心を育もうという意図もあった。除幕式の模様を伝える1935年5月22日の『神戸新聞』には、社内会議において

現下の非常時局に処して適々六百年祭に相当し楠公精神の再認識を全国民に求めて之を宣揚することが主要の目的なるが故に、少数の人士の財による事は適当ならず、極めて零碎の資金をより多くの人士より集め全兵庫県民が、この銅像を仰ぎ見る毎に、彼等の抛出せる少額資金の集積によりて完成したるものなることを痛感せしめ是によりて恒に楠公精神宣揚に関心を繋がりしむるにあらざれば意味をなさずとの結論に達し（以下略）

と議論されたとある。

実際、新聞紙上では県民や市民の「総意」としての銅像という表現が何度も用いられている。それらは、例えば次の通りである。

これこそ兵庫県民の総意はこゝに見事な結晶となつて現はれた、僕らの一銭、俺らが五十銭、県民の赤誠こもる零細な浄金が積り積つて出来上つたその偉大な刀、楠公銅像は金の尊さをも教へてゐる（『神戸新聞』（夕刊）1935 年 5 月 22 日）

金に糸目のない旦那衆相手の芸妓二人の話「あの立派な銅像がそれ一銭二銭が積り積つて出来たんだつせ」「ほんまになアお金は粗末に出来しまへん」/夜の銅像下に訪れた髭の濃いこはさうな紳士「折角来たのに薄すぼんやりして皆目や、なんとか出来んかな」と相手の男に詰らなさに話しかけた、その男「さうだな、市民の手で建設された銅像だから市の電気局が大明灯ぐらゐる建て、もよいぞ」（『神戸新聞』1935 年 5 月 22 日）

後者は湊川公園の銅像付近の様子を「描写」したものだ。同日の新聞には別の「描写」があり、そこでも「『こんな銅像が神戸にできたなんて！僕かて十銭寄附してこの銅像を慥へたんだ』／少年たちが十銭の浄財を出したことによつてこの銅像を仰ぐたびに楠公精神が少年達の頭に波打つたのだ、これ以上の有効且つ適切な實際教育が他にあらうか」とあり、やはり銅像を通した「地域」へのアイデンティティが示されているのだが、この少年たちの描写の前には、銅像に対して挙手する海軍士官の様子描写が置かれている。これは軍神として崇められる楠木に対する、軍部の畏敬の念を示している。つまりここではローカルなアイデンティティとナショナルなアイデンティティが併置されているのである。

もちろん、ローカルなアイデンティティは他の地域との競合を通して獲得されもする。先に紹介したように、飾磨郡家島では風水害に遭い、漁船に深刻な打撃を受けながらも、なお銅像への献金を行っている。それはおそらく、別の地域との競合的な意識とともに、ローカルな空間における釀金の論理が働いていたのではないと思われる。いずれにせよ、ローカルなアイデンティティは、日々神戸新聞紙上に掲載される寄付金の情報（氏名、住所、金額）を介しても構成され、あるいは強化されたとと言えるだろう。

そして、このローカルへのアイデンティティは、ナショナルへのアイデンティティへと読み替えられる。『神戸新聞』社説には「兵庫県民有志の協力に或を言ひ、之が吾等の期する楠公精神を宣揚し、合せて国民精神を作興する所以である」とあるし、同日の紙上にも東久邇附事務官池田亀雄「今後永久に独り本県市民のみならず全国民親しくその威容を仰いで国民精神作興の上に益する」の談話がある（1935 年 5 月 23 日）とある。また兵庫県知事の談話にもこれによる「郷土徳化」と「国体の明徴」が併置されている。こうしたローカルへのアイデンティティのナショナルなそれへの読み替えは、きわめて両義的で曖昧な言葉を通して行われている。それは先に見たように併置されるだけでなく、例えば、「誰かが『これを見てほんとうに我等の楠公だ、といふ気がする』とつぶやく」（『神戸新聞』1935 年 5 月 27 日）という言葉からは、「誰か」も「我等」も誰なのかが明示されることなく、したがってそれは市民でも県民でも、はたまた国民でもあり得る。それら自身が担う意味は状況依存的で、限りなく軽く、かつ重い。

5 おわりに

本稿では 1935 年に行われた大楠公六百年祭に平行して行われた、神戸観光博覧会と神戸新聞社による一連のイベントに注目した。神戸観光博覧会では、国家政策と結びつきながら日本

の歴史や産業を示す物的な展示が行われた。しかも、それらの物品はつねに神戸市というローカルなレベルでの同様の物品と並置されていた。つまり、ローカルなものとナショナルなものが並置されることで、局所的な事象と国家的な事象の連続性がほのめかされていたのである。そしてこのイベントには、地元の商店街も同調した活動を繰り広げていた。

神戸新聞社はこのイベントに共鳴しながら、展覧会と銅像設置を行った。展覧会の展示様式には観光博覧会のそれとの類似性が認められた。また銅像設置においては、神戸市との緊密な連携が認められた。しかも、銅像設置においては、地元の商店街や兵庫県内の「地域」における積極的な奉仕活動や献金活動が認められた。それらは地元のアイデンティティを呼び覚まし、国民という主体へと吸収していく。銅像設置後もナショナルでありローカルでもある「われわれ」の誇りとしての銅像というクリシェが反復され、実践的に国家的なアイデンティティが分節化されたのである。

神戸新聞社はこうしたナショナルなイベントに参画することにより、読者の関心を引き、経済的な利益もえていたはずである。あるいはレコード会社も、楠木に関するレコードの激しい販売合戦を繰り広げていた。国家的なるものと資本的なるものとの複雑な結びつきがあったのである。

もちろん、湊川神社で行われた大楠公六百年祭でも、ローカルとナショナルの節合実践は繰り上げられた。それについては、別稿で検討したい。

参考文献

- 週刊朝日編（1987）『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社。
「郷土」研究会編（2003）『郷土—表象と実践—』嵯峨野書院。
神戸観光博覧会編・発行（1935）『楠公六百年祭記念観光博覧会誌』。
西川長男（2001）『[増補] 国境の越え方』平凡社。
森 正人（2005）「節合される日本文化と弘法大師」地理学評論 78-1、1-27 頁。
森 正人（2007）「国家のイデオロギー装置と国民的偉人」人文論叢 24、165-177 頁。
山崎藤吉他編（1911）『南北朝正閏論纂』。